

## 正義を洪水のように、恵みの業を大河のように

皆さん、イギリスの科学者であるニュートンがどのように「万有引力の法則」を発見したか、よくご存じでしょう。ニュートンがある日、散歩の途中木からリンゴが落ちるのを見て、そこから「万有引力の法則」を見つけたと言われますね。それまで多くの人々が木からリンゴが地に落ちるのを見ていたはずですが、けれども、誰もそのことが何を意味するのかについては注目しませんでした。ただニュートンだけがそれに注目したのです。それゆえニュートンは「万有引力の法則」を発見できたのです。リンゴが落ちることはごく平凡なことです。けれどもある人にとってはもはや平凡なことではありません。新しい世界を見つけるきっかけなのです。そしてそのある人とはほかでもない目覚めている心を持って生きて行く人であり、それゆえ目覚めている人にとっては平凡なものから新しい世界が開かれるのです。

信仰者たちが切に求めている幸せな人生や恵みの人生も同じことが言えます。ニュートンがリンゴを通して「万有引力の法則」を見つけたことと一緒であると言えるでしょう。幸せと恵みがまさに私たちの日常の人生の中から見つけられることだからです。信仰的に言えば、私たちは神様が創造なさった存在であり、この世も神様が創造なさったものであるから、幸せと恵みも私たちのそばにあるはずであるからです。けれども多くの人はその機会を見つげられずに過ごします。幸せな人生、恵みの人生、それは目覚めている人に開かれるものです。

それならニュートンはどうやって目覚めていたのでしょうか。もちろんニュートンは科学者として目覚めた状態で自分の仕事をやってきたのでしょ。けれどももう一つ注目しなければならないことがあります。それは、ニュートンは科学者である以前に信仰者として信仰生活にもいつも絶えず努力していたということです。彼は聖公会の信徒として誠実な信仰生活をしていました。彼の信仰をうかがい知ることができる特別なエピソードがあります。ニュートンの弟子の中の一人がニュートンに「神はいない」と無神論を主張しました。すると、ニュートンはこのように言いました。

「神様に対して不敬なことを言わないでくれ。私は神様を信じているし、その方について研究している。」

そしてニュートンは神学を研究してだけでなく、神様のみ言葉通り生きて行こうと努力しました。そして人々にこのように勧めました。

「主の日が近づいています。その日に備えて誠実な信仰生活をしなければなりません。」

すなわち、ニュートンは信仰者としていつも目覚めた状態で暮らしていましたが、隣人にも誠実な信仰を伝えながら暮らしたのです。ですから立派な科学者として尊敬されているだけでなく、信仰者としての模範にもなりました。彼の人生は神様と共にある人生だったので、

今日と一緒に読んだ福音書も、「信仰者は主の日を、喜びの心をもって迎えるために目を

覚まして生きていかなければならない」ということを知らせてくれています。福音書には結婚式で花婿を迎えるための「付き添い役」の姿が出てきます。当時結婚式を行う時、お客さんは夕方頃から花嫁の家で食べ物を食べながら花嫁を迎えに来る花婿を待っていました。けれども花婿が何時に来るのか正確には分かりませんでした。ある時は夜 11 時半頃来る時もありました。それで「付き添い役」のおとめは灯し火を持って戸外に立って長い間待ちました。もし花婿が来るにもかかわらず「付き添い役」のおとめが準備していなければ大変失礼になるからです。

皆さんは福音書の内容が喩だということはよくご存じであると思います。ですからこの結婚式の日の主の日を意味します。主が再びこられる日です。花婿はイエス様を意味します。もちろん花婿を迎える十人のおとめは信仰者を意味します。しかしまた一方でこの結婚式の日には私たちの人生の幸せや恵みが現実となる日を意味します。主がいつ、どのように再び来られるかが分からないように、幸せと恵みもどのように私たちに訪れるか分からないのだということを知らせてくれているのです。そのため私たちはその時に備えて精神的に目覚めていなければなりません。目覚めていなければその幸せと恵みは私たちのそばをそのまま通り過ぎてしまうからです。

待つということは疲れて、時には退屈でもあるでしょう。なので「付き添い役」のおとめはうとうと居眠りしたり、寝込んでしまったりしたでしょう。このような姿はこの世の事に苦しんで疲れている私たちの姿でもあり、信仰生活がゆるんでいる私たちの姿であるかもしれません。けれどもまさにこのような瞬間が重要です。いつもこのような瞬間こそ、花婿が来るという声が聞こえるのです。

「花婿だ。迎えに出なさい。」(マタイ 25:6)

この叫び声に十人のおとめは皆起きてそれぞれの灯し火を整えました。ところが問題が起きました。十人のおとめの中で五人のおとめの灯し火が消えそうでした。彼女たちは油を別に準備していなかったのです。困惑しました。なので、その五人のおとめは他のおとめたちに、油を分けてくださいと頼みました。しかし断られてしまいました。

福音書には油を準備することができなかった五人のおとめを愚かなおとめと言い、油を準備していた五人のおとめを賢いおとめと記しています。けれども賢いという五人のおとめが、困っているおとめが助けを求めているのに断ってしまう、果して彼女らが賢いおとめなのか、という疑問が起こるかもしれません。賢くて誠実な信仰者なら、困難にある人に自分の物を分かち合わなければならない、という気がするからです。そのとおりです。他人が困難な境遇にあるのに、知らないふりをするのは信仰者の姿ではありません。けれどももどかしいことは、この油は分けてあげることができるものではないということです。

それならその油は何を意味するのでしょうか。今日ご一緒に読んだアモス書は、主の日を喜びの心をもって迎えるために信仰者にこのように勧めています。

「正義を洪水のように／恵みの業を大河のように／尽きることなく流れさせよ。」(アモス 5:24)

油を準備することはまさにこのようなことを意味します。それは神様の意志に従って生きて行くこと、愛と正義を実践することです。なので、もどかしいのですが、分けてあげたく

ても分けてあげることができないのです。自分が自らがして行かなければならないのです。だから愚かだというのです。それに神様は油を準備することができなかった者、み言葉を実践することができなかった者に対しては冷たいのです。戸を閉めて婚宴に入ることができないようになさったのです。愚かなおとめたちは「ちょっと遅れたところで、婚宴の席に入って行くことさえできないようになさることは酷いことだ」と思うかもしれません。戸を開けてくださいと言っても、「わたしはお前たちを知らない」と答えた主人が冷たいという気がします。しかしそれは仕方のない事です。機会はすべての人々に開かれています、いつまでも開かれているのではないからです。

けれどもいつも目覚めている姿で生きて行くのは大変で、疲れるかもしれません。けれども勇気を出してください。使徒パウロは、今日と一緒に読んだテサロニケ書を通して、このように勇気を与えてくれています。

「私たちはいつまでも主と共にいることになります。ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい。」(1 テサ 4:17b-15)

そして私たちが神様のみ言葉通り隣人を愛して、正義を実践しながら生きて行けば、神様も私たちを祝福してくださるでしょう。フランスの哲学者であるシモーヌ・ヴェーユ(Simone Weil)という方は「重力と恩寵」という本を通してこのように言いました。

「恵みは物体が重力に導かれて落ちるようにいつも私たちに向けて下っている。」

もしかしたらニュートンが見つけた「万有引力の法則」の本当の意味はこれであるかもしれません。神様はいつも私たちに恵みを与えようとなさいます。それを受けるか受けないかということは、私たちにかかっています。目覚めている人生を生きて行く時その恵みを受けることができるでしょう。

この一週間、花婿を迎えるような心をもって、灯し火と油を準備する心をもって、隣人を愛して正義を実践して、神様から豊かな恵みを受けられますように心よりお祈りいたします。